

〔後撰和歌集戀〕題去らす

よみ人去らす

君により我身ぞつらき玉だれののみすは戀しと思はましやは

〔類聚名物考 調度五〕玉垂 たまだれ

玉垂は小簾といふべき枕こと葉なるを後世にはそのま、簾の事とせり、古歌には玉垂の小瓶ともつゞけたれば、いかで小竇の事とはすべきを、すべて後世にはこの類多し、見し玉垂のうちぞゆかしきといふ歌を、小野小町が歌といへるは、その出る所つまびらかならず、據とするにたらず、

〔金槐和歌集 秋〕秋のうた

玉だれのこすのひまもる秋風はいも戀しらに身にぞまみける

〔宗祇廻國記 中〕金澤にて、略 中 此在所に稱名寺といへる律院侍り、略 中 三重の塔婆にまうでける

に、老僧に行あひぬ、此塔の由來などたづねければ、これにこそ揚貴妃の玉の簾二かけ安置し侍れ、略 中 一見をゆるし侍るべき由申す、まことにふしぎなる機縁なり、簾のながさ三尺四寸、ひろさは四尺計にて、水精のほそきよのつねのみすよりもなほほそく、かたちは見え侍らず、玉妃のそのいにしへに、九花帳に預侍りけんことなどおもひやり侍れば、千古の感緒今更肝に銘じて、皆人袖をぬらし侍りき、

とをき世のかたみをのこす玉すだれおもひもかけぬそでのつゆかな

〔雅筵醉狂集 附録〕五色 白

高樓の水精の鉤簾まきみれば銀世界なり雪のあけぼの

薛昭蘊詞、水晶簾未捲とあり、圓機活法無名氏雪詩、恍疑銀世界、明訝水晶宮、

〔類聚名物考 調度五〕かやすだれ 萱簾